The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1950年代の吉村順三の著作にみる伝統観について
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1950年代の吉村順三の著作にみる伝統観について

羽藤広輔　信州大学

１．研究の背景と課題設定

1950年代伝統論争の総括のされ方には，不十分な点がある。和風建築批判の実態やその反論について，あまり触れられて来なかったのは，その一例と言える。本研究が取り上げる吉村順三（1908-1997）についても，当時，ニューヨーク近代美術館からの依頼を受け，その中庭に展示する書院造の建築の設計・現場監理を行い，高い評価を受けた一方で，古典建築をそのまま再現する計画のあり方に批判もあった。しかしながら，吉村自身が1950年代当時，どのような伝統観を抱いていたのかについて，詳細な研究は報告されていない。

また1950年代は吉村の活動全体を考える上でも重要な時期と言える。なぜなら吉村は1950年代に入る頃，独立後の設計活動を本格化させ，その後1963年に代表作「軽井沢の山荘」を発表していることから，同時期は吉村がその作家性を確立していった期間と考えられるからである。さらに，1965年７月に発表された「建築と設計　私はなぜ新宮殿の設計から手を引くか」は，吉村自身の伝統理解が系統的に説明された有名な文章であり，本研究にとって重要な資料と言える。

従って本研究では，1950年から1965年における吉村の著作（エッセー，対談記事，作品説明文）を対象資料とし，これらを網羅的に調査することにより，同時期における吉村の伝統観の展開を明らかにする。

２．既往論考と研究の方法

1950年代伝統論争は，主に『新建築』誌上において，丹下健三などの建築家達が，伝統と創造の問題についてそれぞれの主張を展開したものである。藤岡洋保の論考（「伝統論争の歴史」『建築20世紀 PART2』新建築社 1991）によれば，その背景に，社会主義美学の登場，海外からの日本建築への関心，急激な伝統排斥への反動などが挙げられ，1930年代のモダニズム的伝統理解が基礎になったが，他に，「民衆」の視座への共感，「空間」による伝統の把握，「縄文的なもの」への関心，が登場したという。1930年代については，「帝冠様式」に反対したモダニズムの建築家たちが，平面と構造の簡素・明快さ，素材の美の尊重，無装飾，左右非相称，環境との調和，規格の存在，を継承すべき要素に挙げたと説明している。従って本研究では，上記の藤岡の総括を規準に分析を行うものとする。

３．言説の抽出と分析

1950年から1965年の専門誌等における吉村関連の記事は全部で77件あった。その内，エッセーが５件，対談記事が６件，残りの66件は，すべて建築作品発表記事であった。また，66件の作品発表の内，吉村本人の説明文が付されたものは８件のみであった。よって，合計19件の資料を対象とし，伝統に関する言説の抽出と分析を行った。その結果を，表１に示す。研究の過程において，引用文の該当箇所には下線を引き，丸番号を付して表１と対応させた。（紙幅の都合上，１件の引用文のみ，例として示す。）

〈例〉「「自分は大切なことを皆古い日本の建築から学んだのだ」というレーモンド氏の作品の中には，構造の明快な表現①や，優れ

た材料の処理②や，生活と建築の均衡③と云う様な，日本の建築の特性が完くフレッシュな姿で生かされている」（「アントニン・レーモンド」『国際建築』1951.2／表1-1）

4．まとめ

吉村の1950年から1965年の言説に見られる伝統観は，1950年代の伝統論争が活発化する1955年より前とそれ以降に分けた場合，前者では1930年代の論争で形成された伝統理解に関連する内容が中心であり，後者では1950年代に新たに形成された伝統理解に近い内容が加わっており，藤岡の示す伝統論争の総括にほぼ沿った結果となった。

一方，吉村独自の伝統理解の仕方として，主に３つの内容が明らかになった。１点目は，建築と「生活」の均衡を説くものであり，日本はもともと貧乏な国であり，その生活に合った建築のあり方を重視する言説が見られた。また２点目として，「簡単さ」ということが言われ，造形を誇張せず，問題を簡単に処理してきたことを特徴として挙げ，これがモダンさに繋がっているとした。３点目は，建築の設計に際し，「伝統」をどう扱うかについてであり，昔のものを再編成することが創造につながることや，現代的な設備・技術を用いることの重要性が主張された。

２点目，３点目が，50年代後半以降に見られたのに対し，１点目は対象期間を通じて見られた内容であった。その他，既往論考に見られた書院造か数寄屋造かという論点は，吉村の言説にはほとんど見られず，むしろ民家を好んでいたことが明らかとなった。

そうした中，本研究が対象とした資料において，最も多く語られたのが，建物と環境（自然や庭）の関係を重視する考え方であり，これは1930年代に既に形成されていた伝統理解の方向性ではあるものの，吉村の建築設計において重要な思想的背景となっていたものと考えられる。

表１：1950-1965吉村順三著作にみる伝統に関する言説の分析

資料番号	年	月	記事タイトル	種別	平面と構造の簡素・明快さ	素材の美の尊重	無装飾	左右非相称	環境との調和		規格の存在	「民衆」の視座への共感	「空間」による伝統の把握	「縄文的なもの」への関心	生活との均衡	雰囲気	簡単さ	仮設性	再編成としての創造	新しい技術でつくる	暗さ
					30-a	30-b	30-c	30-d	30-e		30-f	50-a	50-b	50-c	他1	他2	他3	他4	他5	他6	他7
1	1951	2	アントニン・レーモンド	エッセー	①	②									③						
2	1952	2	新日本感覚の展示会	エッセー											①						
3	1952	10	最近の問題作を語る	対談記事																	
4	1954	1	有富氏邸	作品説明文					①												
5	1954	1	ニューヨーク近代美術館に展示する日本の家	作品説明文						①											
6	1954	11	欧米の近代建築と各国の伝統	対談記事	①					④	②					③					
—	1955	1	丹下論文																		
—	1955	2	池辺論文																		
7	1956	3	伝統をどう克服するか	対談記事						⑥		④			①		②	③	⑦		
												⑧			⑤						
8	1958	2	山の上に建つモーテル	作品説明文																	
9	1958	3	山のモーテル	作品説明文						①											
10	1958	3	伊豆山に建つモーテル計画案	作品説明文																	
11	1958	3	ロックフェラーセンターの日本航空事務所	作品説明文																	
12	1958	3	東京銀行葉山臨海寮	作品説明文																	
13	1958	11	「明日の小住宅」にもとめるもの	対談記事																	①
14	1959	6	日本的な美しさとは	対談記事									②		③		①				
															⑤		④				
15	1960	2-3	ホテルと旅館	エッセー						①											
16	1961	10	誠実な建築	エッセー																	
17	1963	8	建築創造のもつぼ	対談記事						①											
	1963	12	森の中の家																		
18	1964	1	新宮殿の設計について							①										②	
19	1965	7	建築と設計　私はなぜ新宮殿の設計から手を引くか	エッセー	③				⑥	②			①				④			⑤	